定例記者会見資料　2024.1.18

長者屋敷官衙遺跡四面廂（しめんひさし）建物の全貌について

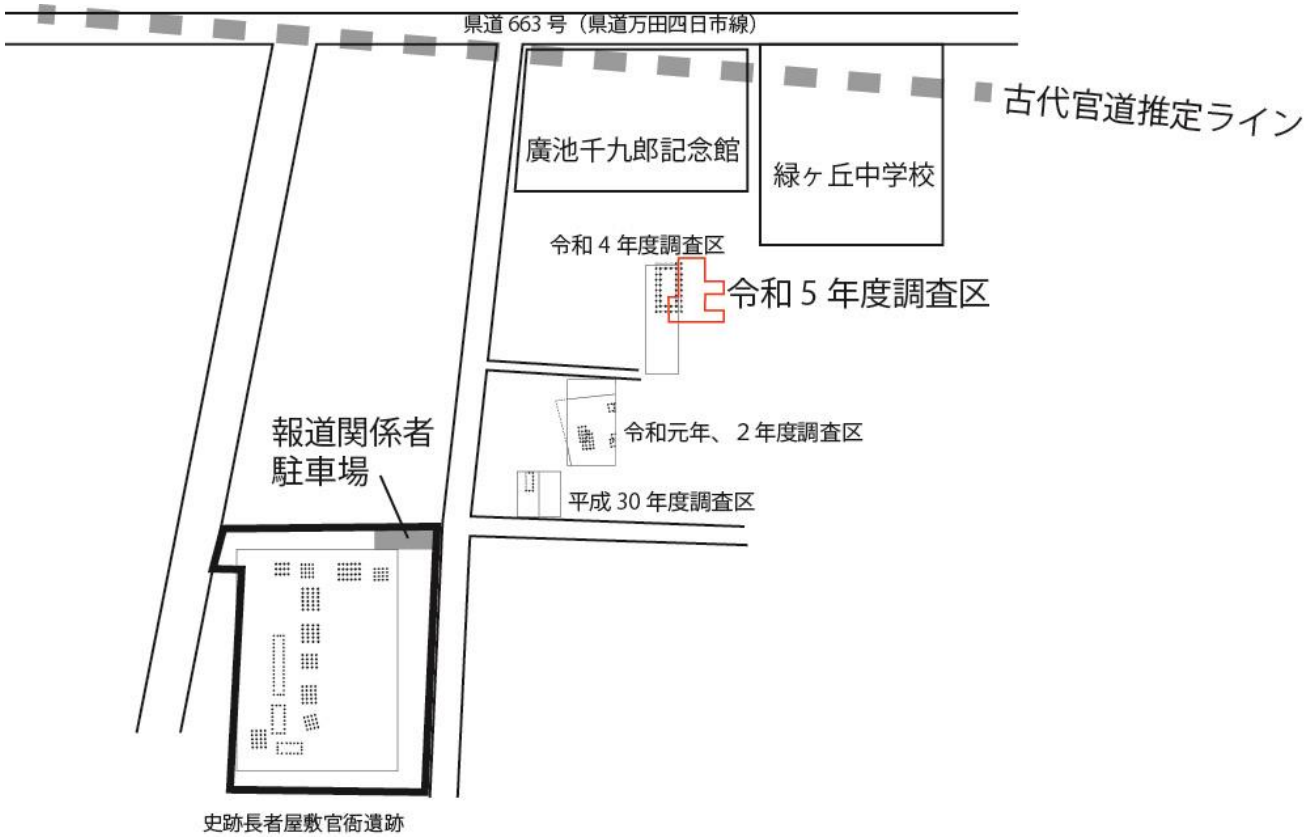
担当：歴史博物館　丸山（電話 0979-23-8615）
携帯電話：090-5040-1210

中津市教育委員会が令和 5 年度に行っている長者屋敷官衙遺跡周辺確認調査で、4 年度に発表しました四面廂建物の全貌を知る貴重な発見がありましたのでご報告します。

発掘調査期間が間もなく終了するため、貴重な四面廂建物の全体のスケールや、官衙遺跡ならではの大きな柱穴の断面を見ることができる最後の機会となります。

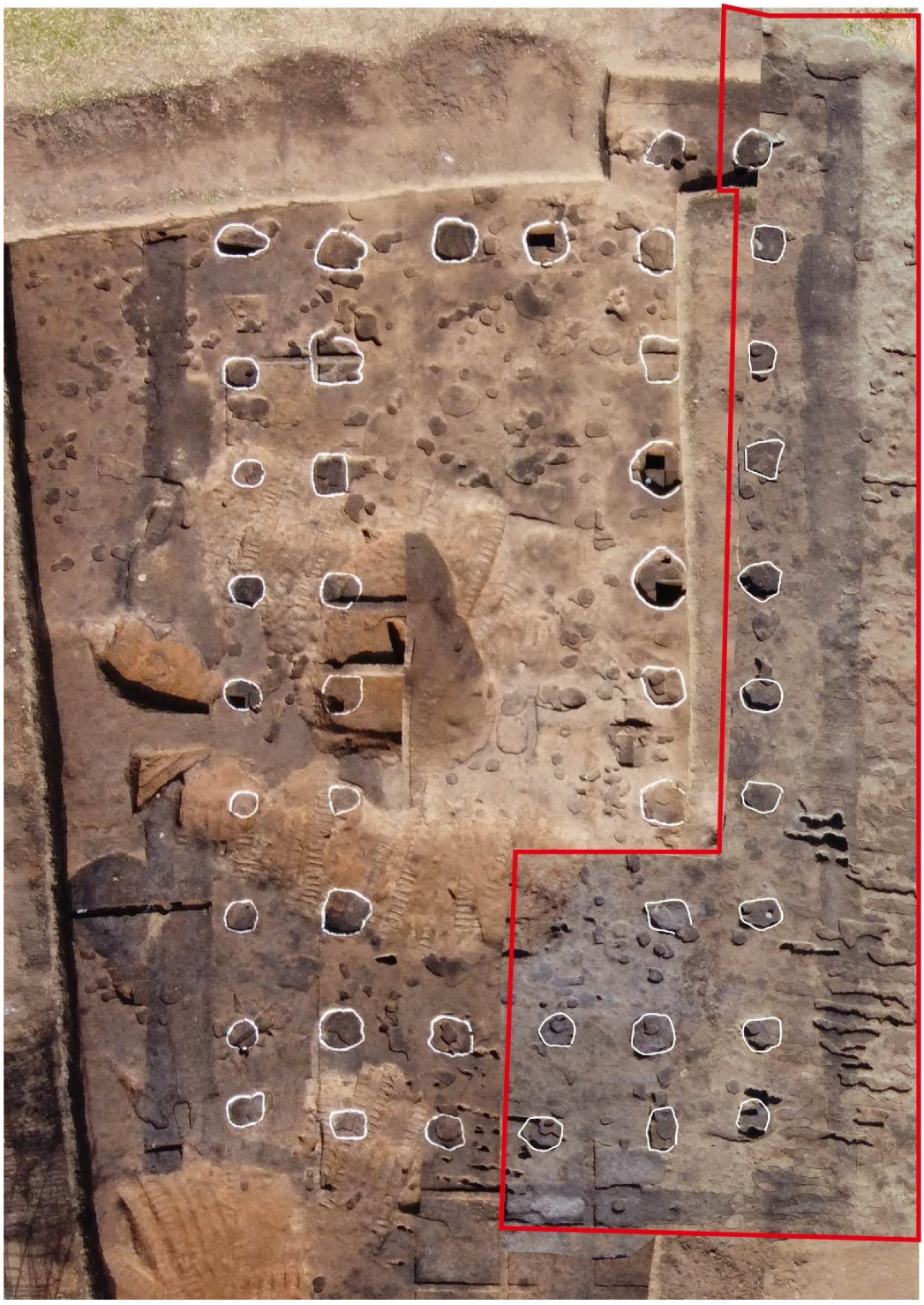
一般向け現地説明会について

日　　時　　令和 6 年 1 月 27 日（土）1 回目 10：00～11：00　2 回目 11：00～12：00
集合場所　　発掘調査現場（駐車場から誘導します）
駐車場　　廣池千九郎記念館駐車場（中津市大字永添 2423 番地）
※駐車場等の事情により、前日までの受付制とします。
中津市歴史博物館までご連絡ください。（TEL0979-23-8615）

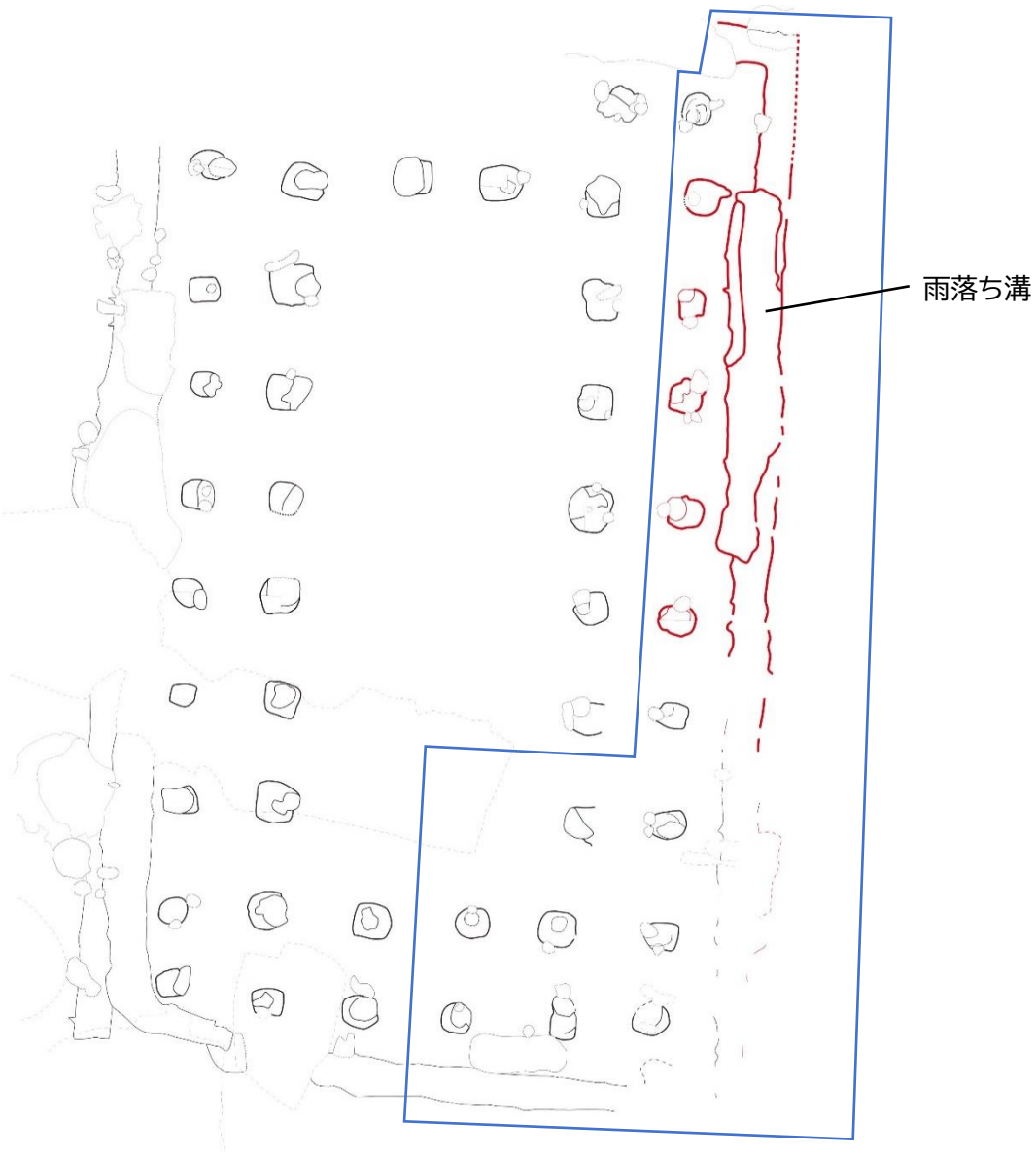


令和４年度調査＋令和５年度調査で、ついに大型建物の全貌が！

令和４年度調査区において、これまで発見した建物の中でもひと際大型の四方向に廂がついた格式の高い建物の一部を確認しました。これは、郡衙全体の構造の解明につながる大きな発見でした。そして、令和５年度の追加調査（20次）において、４年度に想定した位置に柱穴列を確認しました。これで、建物の全貌を確認することができました！



大型建物空撮写真（令和４年度と令和５年度の合成）



令和 4 年度調査区　　令和 5 年度（20 次）調査区（青線囲み）
赤線の遺構が新たに確認されたもの

【遺構】

・南北方向四面廂建物（9×5 間）1棟

北から 2°～3°東へ傾く。身舎建て替えなし、廂の建て替え 1 回。

・雨落ち溝　新旧2条　　・中世八並堀跡

【遺物】

・遺物量は少なく、建物の柱抜き取り穴から 8 世紀前半の高台付破片出土、新雨落ち溝から 8 世紀後半の蓋出土、新雨落ち溝を切るピットから 9 世紀後半の土師器碗出土。

前回の発表内容 （令和 5 年 3 月 8 日　報道向け現地説明会）	今回の発見内容
桁方向：21m、梁方向：11m、面積：231 ㎡の四方向に廂がついた格式の高い建物を発見。 ・平成 30 年度からの調査で長者屋敷官衙遺跡周辺に郡衙関連遺構が広がっていることが明らかになった。長者屋敷官衙遺跡を含む郡衙全体の構造の解明につながる大きな発見といえる。 ・その規模からも国府の政庁クラスに引けを取らない建物。 ・以上のことから下毛郡衙の主要な施設の一部となる可能性が高いと考えられる。	令和 5 年度の追加調査（20 次）において、4 年度に想定した位置に柱穴列を確認した。これで、建物の全貌を確認することができた。 《全貌》 南北方向四面廂建物（ 9×5 間)1棟 北から 2°～3°東へ傾く。身舎建て替えなし、廂の建て替え 1 回。雨落ち溝　新旧2条 ・史跡指定地の柱穴と酷似していることが確認でき、台地の上に倉庫群と四面廂建物を中心とした建物群が同時期に展開する壮大な遺跡であった可能性が高いと考えられる。

柱穴の断面写真

≪参考≫

長者屋敷官衙遺跡とは

「長者屋敷」地名の由来

長者屋敷官衙遺跡という名は、この地から焼け焦げた米が沢山出土することから名づけられた地名「長者屋敷」からきています。長者の米倉が沢山あったが火事にあって炭になってしまったという言い伝えが周辺の集落に伝わっていました。

炭化した米

巨大倉庫群発見

この言い伝えを裏付けるように平成 7 年に市営住宅の建て替えに伴って行われた発掘調査では、古代（奈良時代～平安時代）の米倉が姿を現しました。

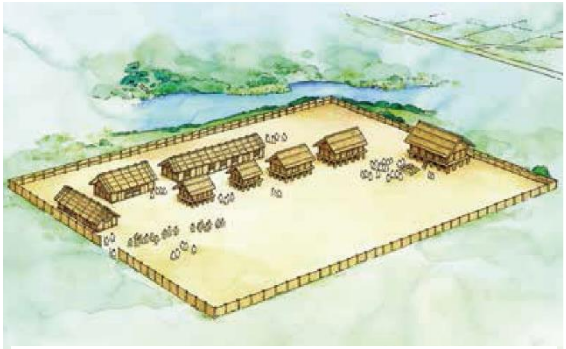
最初の調査の様子

溝や塀で区画された 1 ヘクタールもの広さの中に、巨大な柱穴が同じ方向をむいて 16 棟の大きな倉が整然と並んで建っていました。こうした姿から長者の倉などではなく、日本が国家として歩み始めた時代、地方支配の拠点として置かれた役所、古代郡衙（郡の役所）の正倉であることが分かりました。

国史跡に指定

遺跡は、大分県内で唯一の正倉跡発見例であり、九州でも類例の少ない礎石建ち建物も発見されたこと、一つの区画の中の建物配置の全体像が明らかになったことが評価され、平成 22 年に国史跡に指定されました。

史跡は現在、整備をすすめています。

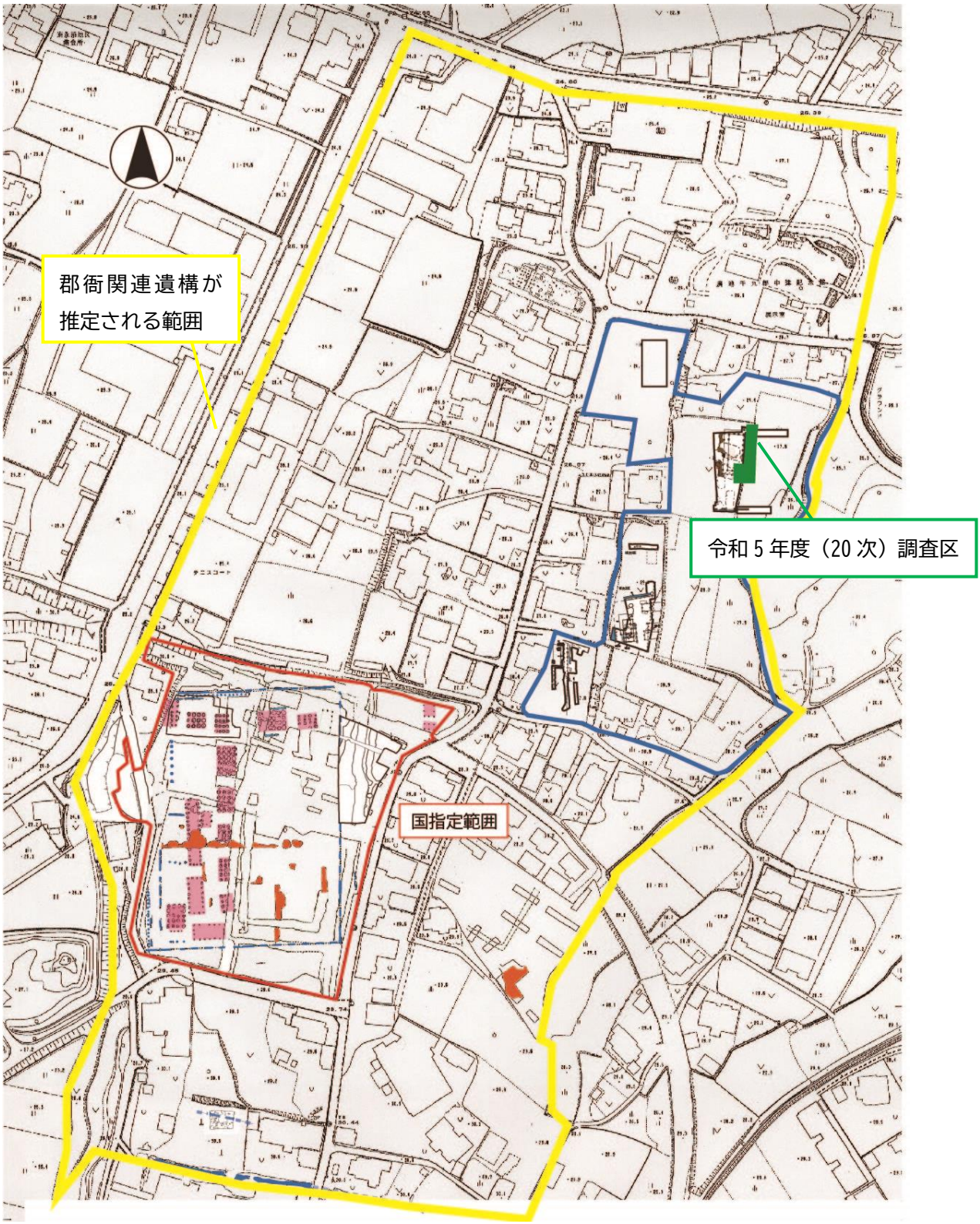


正倉復元図

中心施設はどこに

古代郡衙は「正倉」の他に、役人が政務を執る「郡庁」、来賓の饗応・宿泊施設「館」「厨」などがあります。中津市教育委員会では長年、郡衙の中心施設である「郡庁」を探すために周辺確認調査を続けてきました。

平成 30 年度から、史跡東側（青線の範囲）で遺構確認調査を行っています。
緑塗範囲が今回の令和 5 年度（20 次）調査区です。



史跡指定地と周辺調査区

史跡の周辺調査でこれまで確認した遺構

平成 30 年度

掘立柱建物 1 棟、区画施設（柱列）、土坑など

平成 30 年度調査写真

令和元年、2 年度

掘立柱建物 7 棟　区画施設（溝・柱列）、土坑など

令和 4 年度

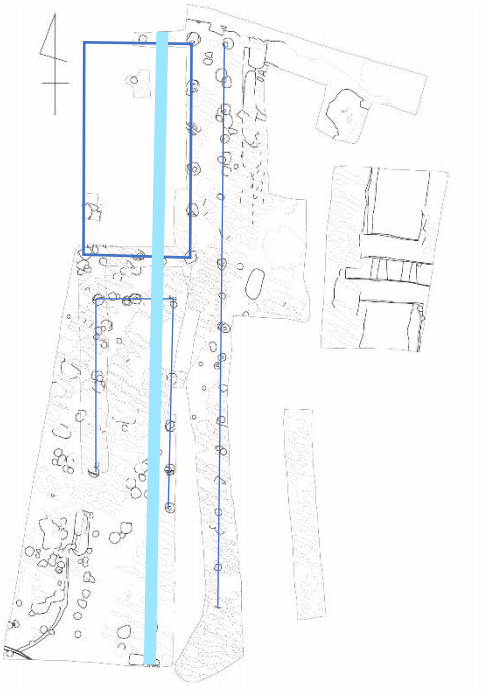
四面廂建物 1 棟、雨落ち溝、土坑など

令和元年、2 年度調査写真

令和 5 年度（19 次）

調査期間：令和 5 年 5 月 17 日～令和 5 年 8 月 31 日

区画施設（溝状遺構）1 条、掘立柱建物か 1 棟、八並城堀跡 1 条

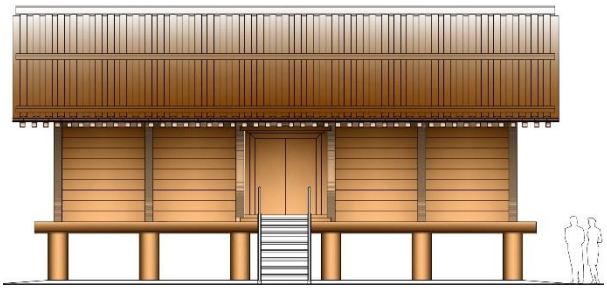


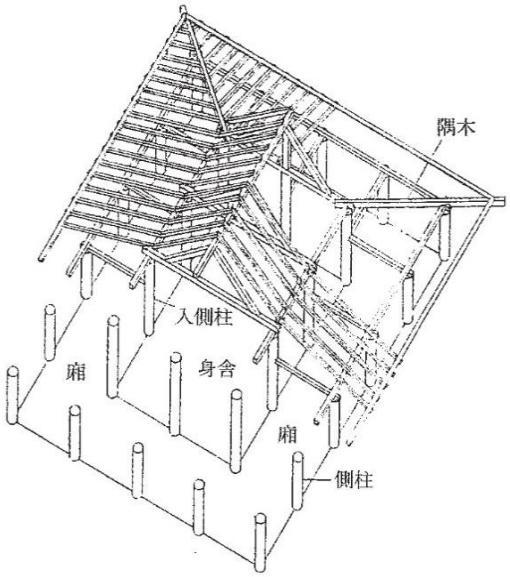
令和 5 年、19 次調査区図面・写真

表　九州の官衙で発見された 200 ㎡を超える四面廂建物

	遺跡名	建物の性格	面積（㎡）
◎1	大宰府跡	正殿	399.25
◎2	大宰府跡	正殿	399.25
○3	筑後国分寺跡	寺院前身遺構か	279.72
○4	肥前国府	正殿	267.43
○5	東山田一本杉	国府出先施設か駅家か郡衙か国司館か	256.90
◎6	大宰府跡	政庁	235.66
◎7	大宰府跡	政庁	235.44
※8	長者屋敷官衙		231.00
○9	筑後国府跡		227.84
※10	大ノ瀬官衙	郡庁正殿	225.72
◎11	大宰府跡	曹司	222.30
※12	ヘボノ木	寺院か郡衙	220.80
※13	ヘボノ木	寺院か郡衙	219.60
◎14	大宰府跡	曹司	219.28
※15	小郡郡衙		204.12
◎16	大宰府跡		201.64

表は小澤太郎 2012「西海道における四面廂建物の様相」『第 15 回古代官衙・集落研究会報告書　四面廂建物を考える　報告編』より、面積 200 ㎡以上の建物を抜粋し、今回発見された建物を加えて作成したもの。郡衙関係では 1、2 番の規模である。





上：長者屋敷官衙遺跡正倉復元図

右：四面廂建物の構造。建物の外側に柱を建て、建物面積を広げる。

（箱崎和久 2012「身舎外周柱列の解釈と上部構造」『第 15 回古代官衙・集落研究会報告書　四面廂建物を考える　報告編』より転載）